

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520065

研究課題名（和文） 宗教的資源の観光的活用と世界遺産指定との関係に関する宗教学的的研究

研究課題名（英文） Religious Studies on the Relationship Between the Use of Religious Resources for tourism and an Assignment a World Heritage listed site

研究代表者

山中 弘（YAMANAKA HIROSHI）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40201842

研究成果の概要（和文）：

世界遺産指定に関わる地域において、宗教を観光資源として活用する動きは非常に強い。これは行政や観光産業の側からの要求であることはもちろんであるが、宗教の側からも、観光を積極的に利用しようという動きも大きい。ただ、当該地域の宗教の位置によって相違が見られる。熊野の事例では神道は積極的であるが、長崎のキリスト教の事例では観光に対して強い懐疑をもっている。また、世界遺産指定を目指す地域では、住民たちが自らの地域の歴史や伝統を改めて自覚し、彼らのアイデンティティを強化している事例が認められる。

研究成果の概要（英文）：

In those areas involved in making a great effort to gain an assignment as a World Heritage listed site, the tendency to utilize religion as a resource of tourism has been highly recognizable. This is partly because concerned local governments and tourism industries are eager to do so, but also some religious bodies have used these opportunities to display their religious messages to tourists. However, how they see tourism depends on the position of religion taken in the context of the region. In Kumano's case Shinto has a very positive position with tourism, because Shinto is dominant in the region. On the contrary, local Catholic churches and believers are very suspicious of tourists from outside, because Christianity in Nagasaki was once severely persecuted and there is still prejudice against it among local people. In some area where people are very active with getting an assignment as a World Heritage listed site, those activities contribute to the strength of their local identity because of their becoming aware of their religious tradition and history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教、ツーリズム、世界遺産、巡礼、商品化

1. 研究開始当初の背景

世界遺産に指定された宗教関連の資産の中で、宗教が観光的資源として活用されることは多い。しかし、世界遺産指定に関する研究は主に文化財の保護といった視点が主流で、宗教的資源の観光的活用という点に注目した研究はほとんど存在しなかった。また、宗教学のなかでも、「観光的活用」という視点は宗教研究と無関係なものとして、これまでほとんど考察の埒外におかれてきた。しかも、行政や観光産業の側には、世界遺産指定を目玉として地域振興や経済的効果を考えるという傾向が顕著に認められる一方で、その対象となっている宗教的世界への認識は驚くほど乏しいというのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、宗教的資源の観光的活用と世界遺産指定との関係の具体的事例として、長崎県のカトリック教会群、四国八十八カ所霊場、奈良、三重、和歌山3県にまたがる熊野という3地域を取り上げて、それらの事例の比較を通じて、世界遺産指定やそれに向けた取り組みがそれぞれの地域の宗教にどのような影響を与え、そのなかで当該宗教がどのように変化しているのかを検討することにあつた。この3つの地域を取り上げる理由は以下の通りである。①これらの地域は、キリスト教、仏教、修験道という諸宗教が地域に根を張っており、それぞれの自治体によってそれらを世界遺産指定に結びつける取り組みが行われている。②3地域は、世界遺産指定に対して異なった位置関係にある。吉野・熊野は既に世界遺産指定を勝ち取っており、各自治体は指定以降に生じている諸問題の解決に取り組むとともに、観光産業は世界遺産指定を利用した様々な取り組みを行っている。長崎は国内暫定リスト入りを果たし、申請に向けて県を挙げての取り組みが進ん

でいる。一方、四国は国内暫定リスト入りまではかなりの課題を残している。③世界遺産指定を目指している宗教伝統の当該社会における位置づけに差異が見られる。長崎の場合、キリスト教は決して多数派の宗教ではなく、むしろ長い間弾圧されてきた少数者の宗教である。これに対して、他の2つの事例では四国の「お接待」の伝統に示されるように、対象となっている宗教が地域の宗教伝統の多数派を形成している。

3. 研究の方法

本研究の課題を達成するために、調査対象となる3つの地域、(1)長崎、(2)熊野、(3)四国霊場のそれぞれについて、①僧侶、神父などの宗教関係者、②地元の信徒たち、③霊場、教会に訪れる観光客、④県及び地方自治体の観光課と観光業者、という4つのアクターを区別し、それらを地域ごとに研究分担者が分担して実地調査、聞き取り調査を行うというものである。調査地域の主な責任分担は、長崎を山中弘、木村勝彦、熊野・吉野を松井圭介、森悟朗、四国を浅川泰宏とした。しかし、研究分担者の人数の制約から3つの地域すべてを同時に行うことは実効性に乏しく、さらに、本研究が長崎のカトリック教会群のこれまでの調査研究の蓄積を基盤にしているために、調査の手順としては、長崎を中心とし、予備的な調査の意味合いを含めて順次、熊野、四国遍路の調査に着手することにした。しかし、現実には、人員と調査者の制約のために、四国は予備調査のみとなり、長崎を中心にして、熊野が調査対象となった。なお、本研究の方法は、①現地でのフィールドワーク、とりわけ先の4つのアクターに対する集中的な聞き取り調査、②世界遺産、観光、対象地域に関する文献研究、という2つの方法を併用した。

4. 研究成果

既に述べたように、本研究の目的は、3つの地域の比較を通じて、世界遺産指定やその指定に向けた取り組みがそれぞれの地域の宗教に与えた変化や影響を検討するというものであった。しかし、四国については予算と人員の関係で予備調査を行っただけで断念したため、ここでは長崎と熊野の2つの地域についてそれぞれ研究成果を述べたい。

(1) 長崎の場合：

世界遺産申請の国内暫定リスト入りした「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の場合には、県、関係自治体を挙げて、平成25年の申請に向けて作業を加速化している。全体を統括する県のレベルでも、資産の絞り込みなどを行っており、資産が位置する自治体でも、バッファゾーンのために、用地買収などが行われている。しかし、注意しなければならないのは、この動きがそのまま観光振興と直結しているわけではないということである。本研究の設定した④のアクターは決して一枚岩ではなく、資産の文化財としての価値に注目する推進室や教育委員会などと、それを観光資源として活用しようとする観光連連盟などの観光振興を目的とする部署との間には、情報の伝達などを含めてずれが認められる。こうしたずれは、①の宗教関係者の間でも認められる。すなわち、長崎大司教区という上位組織の聖職者には、カトリック信仰の宣教と開かれた教会を目指して、教会の世界遺産指定を歓迎する動きがある一方で、当該地域の教会を守る神父たちの間には、教会の観光資源化を危惧する声が根強く存在している。これについては②のアクターでもあり同様で、五島での信徒の聞き取りから、信徒の中には世界遺産化を歓迎し、さらにそれを商売に結びつけようとする人々がいる一方で、それを非常に否定的に受け取ってい

る人々も存在している。

本研究で分析的に設定した4つアクターが相互に関連して推進されているのが「ながさき巡礼」という試みである。これは、長崎大司教区の肝いりで始まったながさき巡礼センターが、いくつかの地域にセンターの出先機関を作り、それが県の観光連盟と司教区が用意した巡礼路をめぐる案内・指導を行うというものである。しかも、センターはNPO法人となり、神父と非カトリックの専従職員が責任を分担している。さらに、巡礼を促進するために、長崎大司教区公認の巡礼証明書、巡礼スタンプ、巡礼バッチを制作し、それを販売している。この事例は、①と④のアクターの連携であり、その後の進展が期待される。カクレキリシタンの伝統を色濃く残す地域を含んでいる平戸市の場合、カクレキリシタン関連の資産の調査を行う一方で、それらの無形の伝統が表現されている景観を「重要文化的景観」として国の指定を受け、間接的に世界遺産指定の動きを観光へと活用することを試みている。とりわけ、6人の殉教者の伝承をもっている根獅子地区では、その伝承と「食」を組み合わせた地域興しを推進しており、それが地域の人々の先祖の信仰への再評価をもたらしている。この地域のカクレキリシタンの組織は既に解散しているために、ここではその宗教的資源は、④と②のアクターたちの共同で行われているといえるだろう。

(2) 熊野の場合：

熊野の既に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産指定を受けており、長崎のように4つのアクターたちが遺産指定の途上にある地域とは状況が異なっている。また、熊野では、本宮、那智、速玉のいずれも神社であり、②は当該地域の地域住民と重なっており、キリスト教信徒の動きとは異なっている。全

体として、世界遺産指定後、熊野古道を中心に観光客が大幅に増え、交通のアクセスが悪かった本宮大社を訪れる観光客も飛躍的に伸びた。その点で、宗教の観光資源への転用は成功したといえよう。長崎の事例との比較で見ると、特に目立つのは①のアクターと④のアクターの密接さであり、場合によっては④が①に強く影響を与えるということが見受けられる。例えば、速玉大社の場合には、観光用に作成された現代版の熊野参詣曼荼羅を境内に設置し、神主自らが、かつての熊野曼荼羅の絵解きをおこなうということもなされている。また、地元の小学生たちが熊野古道の整備を行う作業に従事しており、世界遺産化によって郷土の宗教文化伝統が再発見されている状況も生じている。全体としてみれば、4つのアクターたちは、世界遺産指定を契機に、自らの宗教文化伝統を観光資源として積極的に関わっている。しかし、世界遺産指定によって、①と②との間に軋轢が生まれるという状況も認められる。例えば、新宮の「お燈まつり」は地元の祭りという性格から、より観光客のまなざしを意識したものに变化しており、その結果として、祭りを担う地元の人々の中には、その変化を歓迎しないという声も生まれている。これは、③のアクターが①や②に影響を与えているとも解釈できよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①木村勝彦「観光の倫理的考察に向けて—グローバル리즘と開発の視点から—」、『哲学・思想論叢』、査読有、28号、2010、1-19頁。
- ②Matsui Keisuke, Commodification of a Rural Space in a World Heritage Registration Movement - Case Study of Nagasaki Church Group, Geographical Review of Japan, 82, 査読有, pp.144-169, 2010

[学会発表] (計6件)

- ①山中弘「新しい巡礼の創出」、日本宗教学会、2011年9月3日、関西学院大学。
- ②Matsui Keisuke, Religious Tourism and the World Heritage Registration Movement in Nagasaki, Japan, 2011年8月15日 International Geographical Union-Urban Commission, Canterbury Christ Church University
- ③木村勝彦「聖なる旅の真正性と商品化」日本宗教学会、2010年9月4日、東洋大学
- ④山中弘「宗教」と「ツーリズム」に関する理論的諸問題」日本宗教学会、2010年9月4日、東洋大学
- ⑤松井圭介、「五島列島におけるキリシタン・ツーリズムと世界遺産運動」、日本島嶼学会、2010年9月11日、駒澤大学。
- ⑥松井圭介、「宗教ツーリズムの生成と課題」、2009年9月13日、京都大学、日本宗教学会

[図書] (計4件)

- ①山中弘 (共著)『宗教とツーリズム』世界思想社、2012年、279頁。
- ②木村勝彦 (共著)『観光の地平』学文館、2011年、248頁。
- ③浅川泰宏 (共著)『四国遍路 さまざまな祈りの世界』吉川弘文館、2011年、211頁。
- ④松井圭介 (共著)『観光の空間』ナカニシヤ出版、2009年、248頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中 弘 (YAMANAKA HIROSHI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：40201842

(2) 研究分担者

木村 勝彦 (KIMURA KATSUHIKO)
長崎国際大学・大学院人間社会学部・教授
研究者番号：10195357
松井 圭介 (MATSUI KEISUKE)
筑波大学・生命環境系・准教授
研究者番号：60302353
浅川 泰宏 (ASAKAWA YASUHIRO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：90513200
森 悟朗 (MORI GORO)
國學院大學・研究開発推進機構・助教
研究者番号：10445463